

# 月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第118号 2024年10月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を  
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会  
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1  
近畿大学教職教育部 富岡研究室

e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 学校アーカイブズとしての福岡女学院資料室の取り組み 井上 美香子	2
大東文化大学の1965年度運営要領について －大東文化学園作成の運営上の基本方針－	谷本 宗生 5
大正時代の女子高等教育(67) 同志社女学校の授業	長本 裕子 7
進学案内書にみる戦前期東京の予備校(7):『最近東京遊学案内』(明治41年)(2)	吉野 剛弘 13
子どもたちと考える校則⑮ －「ルールメイキング」を考える(1)－	八田 友和 17
『嘉納治五郎』(1964年)を読む(1)	富岡 勝 21
刊行要項(2015年6月15日現在)	24
短評・文献紹介	25
会員消息	26

## コラム

### 学校アーカイブズとしての 福岡女学院資料室の取り組み

いのうえ みかこ  
井上 美香子

(福岡女学院資料室)

2014年5月17日の創立記念日に、福岡女学院の125周年記念館の6階に資料室および展示室が開設された。それ以前から福岡女学院に「資料室」と呼ばれる場所は存在したが、年史編纂の際に収集した資料を保管するためのただの倉庫にすぎ

なかった。2014年6月に「福岡女学院資料室規程」が制定され、「福岡女学院の歴史及び伝統を後世に継承するために、学院史に関する資料の収集、保存、研究等を行い、本学院の発展に寄与することを目的とする」（「福岡女学院資料室規程」第1条）学校アーカイブズとしての福岡女学院資料室が誕生した。2017年度より、福岡女学院資料室の整備・充実が図られ、専任教員1名と非常勤事務職員1名が配置された。

福岡女学院資料室ではこれまで、①資料の収集・整理・保存・公開、②年史編纂（5年毎）、③『福岡女学院資料室ジャーナル』（年1回）発行、④自校史教育支援、⑤展示活動（常設展・特別展）、⑥ホームページを活用した情報発信などを行ってきた。これらの諸活動において、福岡女学院資料室の取り組みや課題について、①・④・⑤を中心に以下にご紹介したい。

はじめに、①の「資料の収集・整理・保存・公開」については、2017年以前から資料室で保管されてきた資料の整理を進めながら、新たな資料の収集を行っている。福岡女学院は、福岡大空襲で校舎のほとんどを焼失している。それゆえ、戦前は勿論、戦時下の資料はほとんど残っていない。そのため、卒業生へのオーラルヒストリーを実施することで、その当時（主に戦時下）の生徒たちの生活や学校の状況等の記録につとめてきた。しかし、卒業生の高年齢化に伴いオーラルヒストリーの実施そのものが困難となっている現状がある。また、資料の収集・保存という点で最も大きな問題は、学内で日々生産される公文書の殆どが紙媒体ではなく電子媒体となったという点である。この問題については、多くのアーカイブ

ズが直面している共通の課題であると思われる。福岡女学院資料室では、教職員が情報を共有するためのフォルダ（一部の公文書が保存されている）や事務局などから送られてくるメールおよび添付資料等から、保存が必要だと思されるものを適宜データで保存してきた。ただし、事務局や各学校（福岡女学院中高・大学・看護大学・幼稚園・大学院）で日々どれくらいの公文書をはじめとする資料が生産されているのか、その全体像を把握することが難しく今後の大きな課題となっている。

次に、④の「自校史教育支援」として、福岡女学院資料室では自校史教育の一環として大学で開講されている「福岡女学院学」の一部を担当、学生・生徒および新任教職員に対する展示室の案内、自校史教育の映像資料の作成（DVD）と上映、映像資料（DVD）を授業等で利用できるようにその貸出し、などを行っている。

また、⑤の「展示活動（常設展・特別展）」について、福岡女学院資料室では、展示室に常時展示している常設展と年に数回の開催を予定している特別展を行っている。特別展では、福岡女学院の各学校の開園・開学を記念する展示や毎年開催される学院の創立記念日における展示、同窓生のホームカミングデーに合わせた展示などを行っている。現在の学生たちの制作物は 100 年後には歴史的資料になるという観点から、昨年（2023 年）に人文学部メディア・コミュニケーション学科と福岡女学院資料室とのコラボによる特別展「福岡女学院資料室だより&オリジナル書体展」（2023 年 10 月 23 日～11 月 20 日）を開催した。人文学部メディア・コミュニケーション学科において、授業「グループ・プロジェクト」で、「福岡女学院資料室だより」の作成と「オリジナル書体」の作成が行われた。前者は、福岡女学院の歴史を踏まえテーマを決めて学生たちが「福岡女学院資料室だより」を作成、後者は福岡女学院をイメージして、「FUKUOKA JO GAKUIN DESIGN MUSEUM」という 27 文字をデザインするという取り組みである。両者ともに、2023 年時点の学生たちの目からみた福岡女学院とはどのようなイメージであるのかを知ることができ、まさに、100 年後

は貴重な資料となる。同展示は、展示室前の廊下スペースを利用して開催したが、多くの大学生が見学にきてくれた。授業とのコラボによる展示は、双方の目的が一致しないと難しい。今後もこうした活動を広げていけるよう、福岡女学院資料室から、各学部・学科、教員に対する働きかけを引き続き行っていきたいと考えている。

来年、福岡女学院は創立140年を迎え、2035年度には150周年を迎える。150年史の編纂も視野にいれつつ、福岡女学院の歴史を資料を通して残していけるように、精進していきたい。



展示室の様子（2023年撮影）

大東文化大学の1965年度運営要領について  
— 大東文化学園作成の運営上の基本方針 —

たにもと むねお  
谷本 宗生(大東文化大学)

学校法人である大東文化学園が、1965(昭和40)年度運営上の基本方針である「昭和40年度運営要領」を取り纏め、同年4月の理事会で承認している。1967(昭和42)年4月には、大東文化大学東松山校舎(東松山市岩殿)を開設し、また同年6月には、大東医学技術整復専門学校を大東医学技術専門学校と名称改称しているのであった。

以下に、大東文化大学史などでも未見とされる「昭和40年度運営要領」を、抜粋引用しておこう。同上年度の運営要領は、一、教育内容の充実と向上、二、対外活動の積極化、三、財政の調整と確立、四、建設事業の推進、という観点から纏められたものであった。

\*\*\*\*\*

一、教育内容の充実と向上

本学園は大学、大学院、高校、医専それぞれの教育方針を基調とし、よく学生生徒を指導し、専ら教学及び研究の内容充実に重点を施行するとともに、学力の向上、人物の練磨をはかり、学園の権威と実績を挙げるものとする。

- (一) 学科目の編成及び教員組織は設置基準によるも、内容によりては増減を考慮する。
- (二) 講座の持ち時間については、専任教員を主として学生生徒との接触を密接にし、親近感を持たしめる。そのため、受講者少数の場合は特殊な学科目を除き向上せしむる。
- (三) 図書館の施設設備を充実し、学生生徒の習字を向上せしむる。
- (四) …略…

(五) 父兄会、後援会、同窓会を良く指導し、家庭との緊密なる連絡を保持しつつ豊かなる学生生活を体験せしむる。

(六) 医専の短大昇格を期し、認可に関する諸準備を進める。

## 二、対外活動の積極化

本学園は各機関の有機的連絡のもと、東洋の学問、思想、技術の振興普及をはかる一方、アジア及び国際政経の学問、人事の交流を深め、対外的な広報活動を期す。

(一) 学会及び東洋研究所の人事機構を改組し、統一ある活動のもと、成果を期待する。

(二)～(六) …略…

## 三、財政の調整と確立

本学園は財政五ヵ年計画の三年度として、内にありては専ら財政の合理化を期し、経常部面の安定をはかりつつ旧債を消化し、臨時部面において建設設備資金導入に努力する。着眼としては一般の施設、設備を制限し、不急のものはこれを節し、主として人事関係の待遇を伸張す。

(一) 極力学生の大量募集を行い収入の増大をはかる。

(二) 寄附金、学債の募集

## 四、建設事業の推進

本学園の今後における学生の増大を考慮し、左記の建設を進める。

(一) 講堂(体育館)の建設

(二) 教室の改装及び増設(講堂に附設)

(三) 管理棟内改装

(四) 荒川における運動場の獲得、整備

(五) 校地周辺の植樹及び美化

(六) 一般体育施設(テニスコート、洋弓、ゴルフ、バレー、バスケット)

(七) 公有地の払下げ、敷地(埼玉県)

(八) 附属第二高等学校建設準備

## 大正時代の女子高等教育（67）

### 同志社女学校の授業

ながもと ゆうこ  
長本 裕子(ニューズレター同人)

明治10年代の同志社女学校は、予備科(2年制)、本邦科(3年制)、英書科(4年制)から成っていた。最初の3年間はほとんどスタークウェザーが一人で執り行っていた。アメリカン・ボードから派遣されてH.F.パーミリーとJ.ウイilsonが10年10月に来日したが、京都府知事榎村の妨害で、居留許可が下りなかった。ウイilsonは許可が下りるのを待ちきれず、12年に岡山ステーションに移った。13年度、同志社英学校卒業生の宮川経輝と加藤勇次郎が女学校に就任し、新島の再三の要請により同年6月によりやく許可されたパーミリーが加わって4人体制となった。宮川と加藤は熊本洋学校出身で、米国人教師L.L.ジェーンズから学問をはじめ、男女平等思想の薫陶を受けていた。宮川によってカリキュラムが整備された13年度の学科課程は次のようである。

予備科…小学校未卒業の者

1年:小学読本一～四、地理初歩、習字・諸礼、日本地誌略一～三、  
日本略史上

2年:日本略史下、万国地誌略全部、習字作文講義裁縫、万国史略全部、  
筆算教授書上下、初学人身窮理全部、筆算教授書二

本邦科…小学校卒業の者

1年:万国地誌要略、筆算教授書三～五、万国通史、代数学、習字(毎日)、  
裁縫(毎週2回)、作文講義諸礼(毎週1回)

2年:万国通史、代数学、習字(毎日)、裁縫(毎週2回)、作文講義(毎週1  
回)、皇朝史略、物理全志

3年:ダルトン人身究理、グレイ本草学、作文講義(毎週1回)、裁縫(毎週3  
回)、フォセット経済書、化学、修身学天文学、家政要略

英書科…本邦科卒業の者

1年:モツゴファイ第壹~第三読本、綴字読方訳

2年:スウィントン第壹・第二文典、モツゴファイ第四読本、英作文

3年:モツゴファイ第五読本、英作文、スウィントン万国史・万国史続

4年:グリーン英民史小、クエツケボスン文章学、オンドルウッド英文学、  
キソ一文明史

「課程附考」に、“予備科・本邦科の1年に「諸礼」を学ばせて温良貞静の美風を養うことを目的とした。普通学科は英語で学ばせるより日本語で学ばせる方が進歩が速いため、日本語で授業を行った。外国女教師により英語で英文学を教授し、英米諸国の女子の必読書に習熟させるのがねらいであった。”とある。

実務的カリキュラムではすぐれた生徒をひきつけることができず、リベラル・アーツの女学校を目指したことがわかる。生徒は30名前後で、授業は複式で行われていた。

### 明治18年事件

同志社英学校と女学校は地理的に近かったので、礼拝堂や化学実験室等を共用できた。宮川は、卒業前から女学校の授業を受け持っていた。英学校の生徒が女学校の暗唱等の手伝いをするなど、女学校の教師不足を補っていた。このような事情を示す写真がある。明治10年、女学校のスタークウェザーのバイブル・クラスに英学校の生徒と、その妹や婚約者ら女学校の生徒が共に学んでいる写真である。男女ともリラックスしている雰囲気が感じ取れる。



スタークウェザーのバイブル・クラス（明治10年）英学校と女学校の生徒がともに学んだ。

（『同志社女子大学125年』より）

しかし一方で、女学校教育の独自性を損なうという問題を引き起こすことになり、「明治18年事件」の一因となる。英学校の生徒が、女学校にいる彼らの妹・妻・友人に手紙を送り、学校の経営方針に口をはさんでいたのである。英学校関係者は、女学校を独立した学校とは考えずに、女学校の規則の厳格さに抗議するなど、運営に関しても強い影響力を持った。女学校の名目上の校長は新島襄だが、宣教師側は実質的な校長はスタークウェザーが取り仕切れると思っていた。アメリカ側のプランでは、キリスト教的価値観を根付かせるには教室での授業だけではなく、寮生活をも含む毎日の生活を通して、キリスト教信仰や文化を体験させることが重要と考えていた。女生徒は女教員の家族の一員として考慮され、キリスト教の教を説き、暗い世界から救い出すことが目的であった。しかし、その家族の管理をめぐる日本での古い考えと正面からぶつかりあった。日本の男尊女卑思想は根強く、新島でさえ、女性が校長になるという考えになじめなかった。さらに、11年、新校舎が完成した時、パーミリーとウイルソンにまだ京都居留許可が下りておらず、二人の代わりとして、覚馬と八重の母である山本佐久が寄宿舎の舎監となった。すると母を訪ねて八重が女学校に自由に入出入りするようになり、女学校の経営に口を出し始め、経営の実権を握ろうとした。次第に首長の対立が深刻になる。スタークウェザーがアメリカン・ボードの書記N.G.クラークに宛てた手紙によると、

「この屋根の下の全ての事はできる限り外国人教師には知らせない」という八重とその母によって決められた不文律がある。私は生活を通してのキリスト教の感化をしたいと考えているが、それが八重とその母によって邪魔される。生徒もはじめのうちは私たち宣教師の言うことに素直に耳を傾けているのに、何かの決定的な合図が与えられてからは、私たちへの信頼が失われた。(『同志社女子大学125年』より)

というのである。

新島が2回目の外遊中、女学校で「明治18年事件」が起こった。18年6月、日本ミッションは、外国人教師の引き上げを認め、同志社女学校を一時閉鎖する

ことを決議した。原因は「山本佐久・新島八重対スタークウェザーの確執」である。外国人側は当然スタークウェザーが校長で、宣教師主導であると考えた。日本人側では、経営者は新島襄と考え、外国婦人に学校を管理されることに強く反発した。佐久と八重母娘には、クリスチャンとなっても、会津武士の家柄出身としての誉れが根づいている。一方、宣教師としての立場を固守しようとするアメリカ人女性。どちらも譲れなかったのであろう。事件当時女学校にいた女性宣教師は、A.Y.デイヴィス(J.D.デイヴィスの姪)とF.フーパーであった。A.Y.デイヴィスは体調を崩したパーミリーの代役として京都ホームに来た。スタークウェザーもラーネッド夫人(夫は「京都ステーション」の書記D.W.ラーネッド)に付き添って帰国することになり、事件の2年前からA.V.デイヴィスが女学校の責任者の地位にいた。

明治18(1885)年7月6日のJ.D.デイヴィスのクラークへの書簡で、

A.Y.デイヴィスとフーパーの新しい陣営のもとに、女学校の日本人関係者全てと話し合い、今後学校内部の全ての事柄に関しては外国人女性が完全かつ絶対的な支配権を持つという新たな合意に達しました。…しかし、1年経っても事態はほとんど全く改善されませんでした。…さらにもう1年決断を待つことにしました。しかし、やはり改善されることなく、ミスデイヴィスの評判は傷つき、これ以上、同じ過程が繰り返されるのを見るにしのびません。(『同志社女子大学125年』より)

と伝えている。

明治17(1884)年7月10日付D.W.ラーネッドはクラークへの報告で、京都ホームの問題点を5つあげ、その4つ目に新島夫人八重の存在をあげている。「彼女は大筋において、優れた夫人であるが、京都ホームでは役に立たないばかりでなく、彼女の影響力が女教師に対して不利に作用し、不平分子を煽り立てる結果になっており、このことは事態を一層難しくしている」(『同志社女子大学125年』)と述べている。外国人教師の引き上げ、女学校の閉鎖という決議に、日本人教師は狼狽した。女生徒たちは再開を祈り、嘆願書を校長代理の山本寛

馬に提出した。京都の諸教会の牧師が会合して新学期からの開校を決め、アメリカン・ボードに校舎の使用許可を申し入れ、9月1日より開校する運びとなった。日本人教師は、日光で休暇を過ごしていたフーパーに8月早々復帰する依頼の手紙を出し、中島末治教頭は再来日したV.A.クラークソンを横浜で待ち構え、女学校の教師就任依頼をした。クラークソンは神戸英和女学校の第二代校長を務めた人物である。クラークソンは、中島の再三の懇請により、学校生活、寮生活、人格教育等の責任はすべて自分が担うことと、同僚を一人つけることという条件を出して依頼を引き受けた。

### 日本人関係者と宣教師との協力

この事件を機に、同志社関係のクリスチャン男性たちが大澤善助を中心に募金を集め、女学校の経費の案出に力を注ぎはじめた。日本人側は学校の経費と日本人教師の給料、屋内の修理費を受け持ち、ミッション側が燃料費、設備費、修繕費、税金の計400ドルを支払うことになった。2人の女性宣教師の給料1,200ドル(年間)はウーマンズ・ボードからの送金であった。18年12月、新島の帰国を待って、翌19年1月より正規の授業が再開された。新島も2回目の渡米で、学校経営者・校長職にあるクリスチャン女性の姿を見て、女性が女学校の責任者となることを抵抗なく受け入れられるようになった。

「明治18年事件」を機に、日本人関係者が少しずつ自らの姿勢を変えていくようになり、日本人・宣教師が一致協力して、校運隆盛の動機となった。時は鹿鳴館に象徴される欧化主義の全盛期で、生徒数は、18年約30名、19年約70名、20年約140名と倍増していく。クラークソン着任2年目にはウーマンズ・ボードの送金により、100人収容の新校舎を増設した。

同志社女学校草創期の17年間、A.J.スタークウェザー、A.Y.デイヴィス、V.A.クラークソン、F.ホワイト、M.H.マイヤーの5代にわたって女性宣教師が首長として運営にあたった。彼女たちが実施しようとした教育は、マサチューセッツ州のマウント・ホリヨーク方式の教育であった。それは1837年メリー・ライオンによって創

設された女子名門校で、高水準の教育と家庭婦人の養成の両立を目指した。女性が女性を育てるという意識が濃厚であった。明治26年マイヤーが去って、宣教師が女学校の責任者となる体制は終了する。以後同志社英学校卒業生の松浦政泰が単独で女学校教頭になり、日本人による主導へ移行していく。

#### 参考文献

- 『同志社女子大学125年』
- 『同志社百年史』通史編一
- 『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校』上巻・下巻  
宮澤正典『同志社女学校史の研究』  
黒田孔太郎「ジェーンズ物語」

## 進学案内書にみる戦前期東京の予備校(7)：

### 『最近東京遊学案内』(明治41年)(2)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号では、東華堂より刊行された受験学会『最近東京遊学案内』の1907(明治41)年の「第八章 雑種諸学校」に掲載された予備校の情報を見ていく。

#### 正則予備学校

位置 東京市神田区錦町三丁目

目的 本校ハ高等及ビ中等普通学ヲ正則ニ且ツ速成ニ教授スルヲ以テ目的トナス

学科及修業年限 学科ヲ類別シ高等受験科、普通受験科、数理化受験科、同初等受験科、高等数学科、甲種数学科、乙種数学科、丙種数学科、物理化学科トシ修業年限ヲ三ヶ月以上二個年以内トス

入学資格 本校へ入学セントスル者ハ年齢十二年以上ノ者ニシテ品行方正、身体健康タルベシ

学費 学生入学ノ許可ヲ得タル者ハ束修トシテ中学及受験科ニアリテハ金一円  
夜学諸科ハ金五十銭ヲ納付スベク尚ホ生徒入学ノ上ハ左記ノ規定ニ準シ授業料ヲ納入スルモノトス

受験科、中学科 第一学期 全科 金四円

第二学期 同 金三円

第三学期 同 金三円

夜学科 第一学期 全納 金三円五十銭

第二学期 全納 金二円五十銭

## 第三学期 同 金二円五十銭

### 東京予備学院

位置 東京市牛込区神楽坂二丁目二十二番地

目的 本院ハ学生ノ如何ヲ問ハズ其実力ヲ養成スル為メ諸学科共厳正懇切ニ教授シ志望ノ学科ヲ速成セシム

学科 高等受験科、英、数、専修科 英、独、数、普通速成科

学費 入学金五十銭 授業料金一円

### 弘道学院

位置 東京市神田区三崎町三丁目

目的 本学院ハ明治三十五年ノ創立ニ係リ以来諸学校入学志望者ノ為ニ適切ナル学科ヲ教授シ来リシガ今回更ニ教務ヲ拡張シ男子部女子部ニ分チ各専門ノ講師ヲ聘シ懇切ニ教授ス

学科 数学、英学、国語漢文、独語、仏語、簿記

学費 束脩三十銭五十銭乃至一円五十銭

### 東洋学院

【名称は異なるが、1907(明治40)年の東洋中学院と同一】

### 中央中学院

【1907(明治40)年のものに同じ】

### 数学専修学院

位置 東京市神田区錦町三丁目

学科及修業年限 特別速成科、速成本科、高等受験科トシーヶ月乃至三ヶ月ニテ卒業セシム

学費 入塾セントスル者ハ束修トシテ毎科金五十銭ヲ納入スベク尚ホ生徒入学ノ上ハ月謝トシテ数学科ニアリテハ一ヶ月一円五十銭ヲ納入スル者トス

交友義塾

【1907(明治40)年のものに同じ】

東華学館

位置 東京市神田区仲猿楽町七

目的及学科修業年限 本館ハ大学、高等学校、高等師範、陸海軍諸学校、其他各種専門学校、女子大学、女子高等師範学校等へ入学志望者又在学校補習生ノ為メニ左ノ諸般学科ヲ教授ス

国語、漢文、英語、独逸語、数学、歴史、地理、博物、理化、法制、経済、論理学、修業年限ハ三ヶ年トス

学費 中学科一年ハ七十銭二年ハ八十銭三年ハ九十銭随意科初等三十銭中等四十銭高等七十銭速成受験科一年六十銭二年八十銭三年一円

研数学館

位置 東京市神田区猿楽町

目的 本館ハ初等数学ヲ教授スルヲ以テ目的トナス

学科及修業年限 学科ヲ分チ普通科、初等科、予科ノ三科トス予科ハ二ヶ月初等科ハ三ヶ月普通科三ヶ月

学費 入学セント希望スル者ハ束修トシテ金五十銭ヲ納入セラルベク尚ホ学生  
入学ヲ許サレタル時ハ月謝トシテ金八十銭ヲ納付スベキ者ト定ム

晩翠学館

位置 東京市神田区淡路町二丁目

目的 本舎ハ官公私立学校へ入学セント欲スル者ノ採用試験ニ応スル者ニ必  
要ノ学科ヲ教授セントスルヲ以テ目的トナス

学科及修業年限 学科ヲ類別シ普通科、高等科トシテ漢文、数学、英語ヲ教授ス

学費 本科ニ入学セントスル者ハ束修三十銭トシ入校ノ上ハ左ノ區別ニ従ヒ授  
業料ヲ納付スベシ

普通科 金四十銭 高等科 金五十銭

1911(明治 44)年のものは、1908(明治 41)年のものと全く同一である。  
次号からは、1914(大正 3)年のものを検討していく。

## 子どもたちと考える校則⑮

### －「ルールメイキング」を考える(1)－

はったともかず  
八田 友和(クラーク記念国際高等学校)

#### 1. はじめに

近年、校則の見直しを行うにあたって「ルールメイキング」の取り組みが注目されている。ルールメイキングは、「学校の校則・ルールの対話的な見直しを通じて、みんなが主体的に関われる学校をつくっていく取り組み<sup>1)</sup>」を指し、生徒や教員同士で対話を重ね、全員の納得解をつくるプロセスを重視している。全国各地で実践がおこなわれ、その成果も蓄積されつつある<sup>2)</sup>。

そこで、本号および次号において「みんなのルールメイキング」プロジェクトを事例に、「ルールメイキング」について考えていきたい。

#### 2. 「みんなのルールメイキング」とは

みんなのルールメイキング(以下、「プロジェクト」と表記する)とは、「生徒が中心となり先生や関係者と対話しながら校則・ルールを見直していく取り組み<sup>3)</sup>」と定義することができる。プロジェクトは、特定非営利活動法人カタリバが事務局となり、賛同する関係者・関係機関により全国各地で展開されている。

このプロジェクトは、身の回りの課題に気づき、当事者意識をもって行動する力や、社会参画への意識を高めていくことを目指している<sup>4)</sup>。

#### 3. みんなのルールメイキング宣言

プロジェクトにおいては、校則・ルールの制定や見直しを進めるうえで大切にしていることとして「みんなのルールメイキング宣言」(以下、「宣言」と表記する)を制定している。宣言は、ルールメイキングに関わる全ての人が立ちかえられる指針として、校則の見直しに携わる生徒や先生、中高生有志メンバー、有識者が約半年にわたり検討をおこない、作成している。

宣言の前文は「自分たちのルールは、自分たちで話し合い、自分たちでつくる」という力強いメッセージからはじまっている。また、ルールメイキングに取り組む理由として、次のような説明がある。

我が国の教育基本法は、「平和で民主的な国家及び社会の形成者」を育むことを教育の目的としています。それはすなわち、他者の自由を認めることのできる、自由で自立した市民の育成です。

この教育の「最上位目的」を達成するためにこそ、私たちはルールメイキングに取り組めます。

（出典）『みんなのルールメイキング宣言』p.4より引用

ここから、校則を見直すための手法として「ルールメイキング」を採用しているのではなく、教育の最上位目的を達成することを目指すために「ルールメイキング」という手法が採用されていることがわかる。

#### 4. 3つの原則と9ヶ条

宣言において、校則・ルールの制定や見直しを進める際の「前提にしたい3つの原則」および「大切にしたい9ヶ条」が紹介されている。

##### 3つの原則

- (1) 一人ひとりの尊厳を大切に
- (2) 「そもそも何のための学校か」を最上位に
- (3) 学校は校則を公開し、その制定・改廃への生徒の参画を保障する。

##### 9ヶ条

- ① 一人ひとりが安心して居られ、声に耳を傾け合える環境づくり

- ② 疑問をもった「私」からはじめる
- ③ 「なぜ、この校則・ルールが存在するのか」を確認する
- ④ 固定観念にとらわれない
- ⑤ 目的にかなう手段(校則・ルール)を論理的に提案する
- ⑥ 論点を明確にして、対話でみんなの納得解をつくる
- ⑦ 関係者が取り組みを見えるようにする
- ⑧ できた校則は公開する
- ⑨ 一度つくった校則・ルールを見直し続ける

それぞれの詳細な説明については、熊本大学教育学部の苫野一徳准教授による3原則の解説が紹介されている。詳細はそちらを確認していただきたい。

## 5. 雑感

本稿では、「みんなのルールメイキング」についての概要を整理してきた。この取り組みからも、校則を見直すことは“目的”ではなく、あくまでも“手段”であることを再認識した。校則の見直しは、「よりよい学校をつくるため」「気持ちよく生活するため」の一つの手段である。本プロジェクトにおいても、ルールメイキングの目的を「教育の最上位目的を達成するため」と設定している。筆者自身、「みんなのルールメイキング」に関する資料を読み込み、各地で行われたルールメイキングの実践事例を調べるなかで、納得する部分が多くあった。次号では、『ルールメイキング教員ガイド』をもとに、ルールメイキングの具体的な流れについて紹介を行う。

## 6. さいごに

この連載では末尾にQRコードを添付しています。拙稿に対するご意見・ご感想などございましたら、ぜひQRコードからお寄せいただけますと幸いです。今後の研究や執筆活動の参考にさせていただきます。なお、本稿における内容や意見

は、筆者個人に属し、筆者が所属するいかなる組織・団体の  
公式見解を示すものではありません。



ご意見・ご感想などは、上記のQRコードからお寄せください。

## 註

1) みんなのルールメイキングより引用(2024年10月4日確認)

<https://rulemaking.jp/>

2) 古田雄一「生徒参加による対話的な校則見直しの市民性教育効果と課題—安田女子中学高等学校「ルールメイキングプロジェクト」の事例から—」(『国際研究論叢』第35巻3号, pp.97-116, 2022年収録)や、古田雄一・認定 NPO 法人カタリバ(編)『校則が変わる、生徒が変わる、学校が変わる—みんなのルールメイキングプロジェクト—』(学事出版, 2022年)をはじめとした論文・著書においてルールメイキングの取り組みが整理・紹介されている。

3) 認定特定非営利活動法人カタリバ『ルールメイキング教員ガイド』p.1より引用。

4) 前掲書p.1を参照。

## 参考文献

・古田雄一・古瀬正也(編)『ルールメイキング宣言』認定特定非営利活動法人カタリバルールメイカー育成プロジェクト, 2022年

・古市雄一・認定NPO法人カタリバ『校則が変わる、生徒が変わる、学校が変わる』学事出版, 2022年

・認定特定非営利活動法人カタリバ『ルールメイキング教員ガイド』

・みんなのルールメイキング(2024年9月15日)

<https://rulemaking.jp/>

## 『嘉納治五郎』（1964年）を読む(1)

とみおか まさる  
富岡 勝 (近畿大学)

前号まで、「旧制灘中学の教育目標と生徒の活動」を12回続け、おもに急性灘中学の創立時の教育方針を深く理解することを目的に関係史料を紹介し、若干のコメントを書いてきた。

次に生徒の活動について述べるべきところだが、灘中学校の設立にかかわり、同校の顧問として創立期の教育に影響を与えた嘉納治五郎の教育論は興味深かったので、灘中学に関わる前の嘉納治五郎についてもう少し知っておきたい気持ちが出てきた。そこで、前号の「短評・文献紹介」で述べたように、嘉納治五郎に関する基本文献の一つである『嘉納治五郎』（講道館、1964年）を読んで、気になるトピックを紹介することにしたい。おそらく4回か5回程度はこのシリーズを続けることになるのではと予想する。また全部の章を章立て順に紹介するというよりは、興味を持ったトピックを順不同に紹介することになるかもしれない。

本号では、同書の目次を紹介したい。前号の「短評・文献紹介」でも述べたように、同書は教育家としての活動（第二章）に全678頁中の約三分の一にあたる230頁を費やして重視していることが注目される。また、灘中顧問としての嘉納治五郎が、「精力善用自他共栄」を説いたり競技スポーツの欠点を指摘して「攻防式国民体育」を推奨したりしていたこと背景を知る上で、他の章も参考になると思われる。

---

### 序

#### 第一章 生い立ち

##### 一 生誕と家庭

二 修学と交友

三 柔術修行

## 第二章 教育家としての嘉納治五郎

一 教育精神の形成過程

二 教育精神につちかったもの

- 1 はじめて教職に就く —学習院大学教授として—
- 2 教育こそは男子の本懐 —第一次洋行による確信—
- 3 アジア・アフリカへの最初の接触 —第一次洋行の往復—
- 4 選ばれたる青年を相手に —第五高等中学校長時代とその前後—
- 5 嘉納塾における少年の薫陶

三 嘉納教育精神の精華

- 1 教育の事、天下これより偉なるはなく、楽しきはなし —高師校長（第一次）として—
- 2 教育尊重の正義感にもえて —非職二回・高師校長（第二次）とその前後—
- 3 中国留学生の師父となる —亦楽書院・宏文学院・清国漫遊—
- 4 中等教育会
- 5 高師の嘉納か 嘉納の高師か —高師校長（第三次）—

四 嘉納教育精神の世界性と永続性

- 1 教師の教師より人類の教師へ —高師退職後の世界的活躍—
- 2 一世の化育遠く百世に及ぶ —世界に洽ねく日本文化の種をまく—

## 第三章 講道館柔道の創始とその発展

一 講道館柔道の成立

- 1 講道館の成立
- 2 講道館柔道の構想

## 二 講道館柔道の発展

- 1 講道館柔道の精神面における進展
- 2 講道館柔道の実技面における進展
- 3 講道館道場の発展
- 4 講道館の諸行事の整備
- 5 講道館組織面における整備と発展
- 6 門人の指導と柔道普及対策
- 7 師範の経済的負担と各方面からの援助
- 8 講道館柔道の海外進出

## 第四章 「体育の父」嘉納治五郎

- 一 体育への自覚
- 二 体育観
- 三 学校体育の推進
- 四 スポーツの先覚者
- 五 大日本体育協会の創設
- 六 オリンピック大会
- 七 第十二回オリンピック東京招致

## 第五章 暮年と終焉

- 一 暮年活動の二三
- 二 逝去
- 三 その人と生涯
- 四 むすび

あとがき

---

(次号に続く)

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』  
刊行要項(2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。  
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

本年9月末日の東京新聞を読んでいて、次のような記事が気になりました。それは「奨学金返済 金利上昇 思わぬ負担増」（紙面1面）という記事です。記事によれば、金利上昇により月6万円貸与なら、3年前より24万円負担増になるとの趣旨で、正直とても驚きました。私自身もかつて大学院生時代に修士・博士課程の5年間ほど、当時の日本育英会より奨学金をお借りしてなんとか学ぶことができ、教育研究職に15年間継続従事した後、奨学金の免済扱いとなりました。奨学金については、とてもありがたく今でも感謝しています。それが、先の記事によれば、現在の日本学生支援機構の返済シミュレーションを、次の条件（月6万円貸与の奨学金を4年間受けて、返済期間16年間の想定）で試算すると、3年前の2021年4月の利率であれば、返済総額は294万6199円であって、記事執筆時点の金利ならば、318万6222円となり、すでに24万円ほど負担増となるよし。これ以上の金利上昇なら、返済負担がより重くなる見通しであり、奨学金の利用者に対しかなり酷ではないだろうか。たとえば日本学生支援機構と国が協議し、金利の上昇分については、手数料不要なネット系銀行を活用するなどし、なんとか奨学金利用者の負担を軽減してあげてもらいたい…と願っています。（谷本）

博学連携研究員をしている国立歴史民俗博物館より、企画展図録『歴史の未来-過去を伝えるひと・もの・データ』をご恵送いただきました。

### 【目次】

- 第1章 過去への注目
- 第2章 過去の消滅～危機との対峙～
- 第3章 現代という過去～経験の記録～
- 第4章 情報技術の誕生と資料理解の変化
- 第5章 技術の進展とデジタル技法の「いま」
- 第6章 未来の歴史資料像と博物館

第3章には、阪神・淡路大震災時に神戸市立鷹取中学校の避難所ボランティア本部が発行した避難所通信が取り上げられていました。

鷹取中学校は、お世話になっている先生が当時、避難所対応をされていた学校です。

というも…阪神・淡路大震災発災時に避難所対応をされていた先生が

教育顧問としてクラーク高校芦屋キャンパスに何名か所在籍されています。  
今度、図録を手につくりに話してみようと思います。(八田)

西洋建築・庭園史の桑木野幸司氏(大阪大学教授。『ルネサンス庭園の精神史』でサントリー学芸賞受賞)が2024年5月6日付『朝日新聞』に「心の中の街に刻む「記憶術」という文章を寄稿している。西欧の古代ローマ時代やルネサンス時代に、「町並み・記憶・仮想空間」を巧みに活用した「記憶術」が存在していたと桑木氏は述べている。この記憶術の原理は次のようなものであるという。1) 心の中に普段見知った建物の空間を刻みつける。2) 次いで、覚えたい事柄を映像化する。例えば、「戦争」なら兵士の姿、「平和」なら白い鳩といった具合に絵文字をつくる)。3) これらのイメージを1)の仮想建築内に、一定の間隔で置いていく。4) 心のなかで空間を巡り、イメージに出会うたびにその内容を取り出していく。不要になったイメージを消去すれば、器となる仮想建築は使いまわしが可能。

この「記憶術」は、やがて紙の低価格化や出版文化の発展とともに忘却されていったが、現代の都市文明のあり方を再考するヒントがつかまっているとして桑木氏は次のように指摘する。「古い建築を移築して冷凍保存するのではなく、我々の生活の中で活用し続けることが、豊かな記憶を次の世代に伝えてゆく有効な手段となろう。また、過去／歴史の証人としての建造物を残すことは、恣意的な記憶の書き換えに抗する強固な砦ともなろう」。単なるノスタルジーではなく、歴史の証人として古い建造物を保存する意義があるという、この指摘は、大学の校舎、寄宿舎、グラウンドなどにも言えるのではないだろうかと思った。桑木氏の著書『記憶術全史 ムネモシュネの饗宴』を読んでみたくなった。

(富岡)

---

## 会員消息

---

先日、東京学芸大学にて開催された教育史学会の全国大会に参加しました。総会・シンポなどに参加でき有意義でした。しかし、大会開催の始まりが土曜であったため、個人的なスケジュールとして、大学で後期に担当している授業3科目(全学共通・教職科目・大学院特殊演習)の日本教育史それぞれの授業で週明けに扱うレジュメ資料データの事前提供を、大学ポータルクラウドにアップロードする作業を金曜のうちに済ませなければならず、四苦八苦の思いをしてちょっとたいへんでした。

ただコロナ禍でのオンライン大会と異なり、やはり直接の肌感覚で教育史研究の最前線を学べ、また研究者諸氏と親しく交流できてよかったです。今回は自主的な懇親会を参

加者のそれぞれで相応に催したのですが、やはり学会大会としての正規な懇親会は、大会参加者にとって有用な機会であろうと痛感しました。国分寺での個別な夕食会では、同人の雨宮・長谷川・猪股・田中さんらにお世話になり、どうもありがとうございました。

研究者らで交わす屈託ない挨拶や雑談に、有益な情報が自然に含まれているという話もよく聞きますが、私が知りたい聞きたいことの確信や未確認で意外なことの発見・気付きも研究者仲間の交流の場にはあって、貴重な時間を共有できとても幸いでした。また雨宮さん同人らの近況も詳しくうかがえ、諸氏が新たな職場にて苦勞しながらもよく奮闘し活躍していることも分かり、正直安心しました。これからの未来ある、若き研究者らの成長やその可能性に幸多からんと願うばかりです。(谷本)

少し前に舞鶴引揚記念館(京都府舞鶴市)の企画展「あなたに届け!この想い」を見に行きました。舞鶴引揚記念館の公式サイトでは、企画展について次のような説明文が掲載されています。

シベリア抑留中に一部の収容所では「俘虜用郵便葉書」と呼ばれる往復はがきが日本人抑留者に配られることがありました。日本で暮らす家族や友人などに安否を知らせる唯一の手段でした。厳しい環境について書くことが許されない中で自分の想いを家族などに届けました。返信では日本に住む家族も抑留されている父や夫、息子へ日本で待つ人々の想いを届けました。

今回の展示では抑留者と家族など双方の想いをつないだ俘虜用郵便葉書にフォーカスした展示をおこないます。

二宮和也さんが主演を務めた映画『ラーゲリーより愛を込めて』の影響か、館内には多くの人がありました。私もこの映画を見て、心揺さぶられた一人です。

常設展示を見学した後、シベリアの抑留地と日本の家族を繋いだ俘虜用郵便葉書をじっくり読みました。遠く離れた土地に抑留され、いつ「帰国(ダモイ)」になるかわからないなか、過酷な労働に従事している人々にとって、家族からの葉書はどれほど大きな希望であり、喜びであったか計り知れません。

終戦当時、海外にいた軍人・軍属と民間人(約660万人)は、当時の日本人口の約9%にあたります。戦時中は“軍事郵便”が戦地と国内を繋ぎ、終戦後は“俘虜郵便”が海外と国内を繋ぐ役割を果たしました。

もちろん、郵便のやり取りができるうちはまだ余裕があった時期です。戦争が激化すると郵便の取り扱い自体が難しくなります。お互いにコミュニケーションが取れない状況は、

海外で戦う兵士はもちろん、国内で帰りを待つ家族も大変な心配・不安・絶望の気持ちを抱いたのではないのでしょうか。

「手紙を書く」「手紙を待つ」「手紙を届ける」…といったそれぞれの行為についても深く考えていきたいと思います。(八田)

鈴木大裕氏の『崩壊する日本の公教育』(集英社新書)を読みました。学ぶところが多く、本当に納得できる内容でした。大学の教職課程を担当している者にとってもおすすめしたい書です。(山本剛)

同人の加藤善子さんをはじめとした『深志の自治』(井上義和・加藤善子編著、信濃毎日新聞社、2023年)執筆者のうちの数名で、松本深志高校の探究授業のお手伝いをしています。10数名の生徒が深志の自治活動に関して「問い」を設定し、資料を調べ、考察し、結果を発表するという授業です。『深志の自治』で戦後初期の歴史の箇所を担当した私としては、現代の生徒が史料を手にとって活用している光景を目にすることができて、幸せな気分になりました。(富岡)

本ニュースレターのPDFファイルをダウンロードし、Adobe Reader等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4サイズ両面刷り」で印刷すれば、A5サイズの小冊子を作るこ